

銀杏

発行所

〒792-0835

新居浜市山根町8番1号

曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行 瑞應寺

電話(0897)41-6563

FAX(0897)40-3127

https://zuioji.jp

毎月1日発行

(振替 01330-2-31918)

瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語【三十六】

後堂門原信典

第十九則「俱胝一指頭」寐語⑬
抑下托上(一)

【評唱】

これから俱胝和尚の「二指頭」の教えを祖師方がそれぞれの立場で説かれます。

『長慶道、美食不中飽人喫。玄沙道、我当时若見、拗折指頭』

『長慶道わく、美食飽人の喫に中らずと。玄沙道わく、我当时若見ば、指頭を拗折せんと』

この「道」には「言う」となえる」という意味があります。只の発言では無く、目的地つまり佛道に導く意を表します。

先ず長慶慧稜禪師が言われました。「どんな美味しそうな馳走(美食)が目の前に並んでいても、満腹な人(飽人)は見向きもしないだろう(喫に中らず)。ワシも佛法と云う馳走に囲まれて腹

いっぱいだ。俱胝和尚の一本の指

なんぞ見たくも無い」と云うところ

でしようか。更に兄弟子の

玄沙師備禪師は「ワシがそこに居

たら、その指をへし折ってやった

ものを」と言われました。

私達がみ佛様の功德を讃嘆する

法要の回向に「佛身充滿於法界、

普現一切群生前、随縁赴感靡不周、

而常处此菩提座」と云う、華嚴經

が出典の偈があります。

「佛身は法界に充滿し、普く

一切群生の前に現す」これは「み

佛様のお身体も教えも、今この世

界に満ち満ちて私達の周りに現

れつばなし」傘松道詠の「峰の色

谷の響きも皆ながら我が釈迦牟尼

の声と姿」と同じです。長慶禪

師の「美食不中飽人喫」の事です。

何故見向きもしないかと云えば、

次の二切群生の前」という表現が

大事です。「二切の群生」とは、一切の生きとし生ける物全てです。一切群生の「前」にみ佛様は出現されていると云うのですが、この「前」と云うのは「前と後ろ」と云う場所的な意味では無く、私が私として生きようとしている以前、生命の事です。なぜなら群生も法界の身ですから。魚は水の中に生死します。水と一体なのです。私は佛法の中に在って私と佛法と一つ。佛法で腹いっぱいのは長慶禪師も佛法と云う馳走の中。

それが「我が釈迦牟尼」。つまり私とお釈迦様とは本来一つです。

私達は生と死に始まり、良い悪い、好き嫌い、幸せ不幸せと、全てを二つに分けてしまっています。

「裏を見せ、表を見せて散るもみじ」と云う良寛様のお歌の通り、表だけ裏だけと、どちらか一方を選ぶ事は出来ません。真実は一つです。二通りに見る「前」と云う意味です。

私達は今こうして無条件に生かされています。「ホトケさんっていったい何?」「どこに居て私を救ってくれるのか?」と疑う事も含めて、この私の身体は、この私の生命は、私が苦しかろうが、辛かりうが、例えば病にあつても、「神も佛も無いものか」と云う絶望の中に在っても、生縁の尽きるまで

「何としても生きていくんだ」と、私の全てをいただいて生きようと努力しています。私は私の生命に救われているのです。

以前紹介したのでご記憶の方も有るかも知れませんが、シェークスピア・戯曲マクベスの中の「たとえ嵐の中でも時は過ぎ行く」という言葉。私個人ではどうにもならない無常の世界を生きる生命の姿です。

この逃げる事も、選ぶ事も出来ない、無常という真実をいただいて、その「時」を只み佛様の教え(戒法)に従って、私の身心が少しでも佛作佛行を実行して生きていけるこそ真の「すくい」それが成佛道です。特別な人だけが佛道を実行出来るのではありません。誰でも何処でも何時でも佛縁が結べるのです。

嵐の中でも「時」の風景。生命の風景です。何があつても私達はみ佛様に見守られています。

それがこの回向文の後半「縁に随ひ、感に赴いて周からず」ということ。靡し 而も常に此の菩提座に処したもう」と云うお示しです。

たとえ私達がどんな迷いや苦しみの中に在っても、その状況や境遇に関わらず、その縁に随ひ(随縁)信じ拠り所とする心を感じ取り、それに応じて赴き(赴感)必ず導いて下さるのです。

「靡」は「無し」で否定の助字。「周」は「あまねし、ゆきわたる」み佛様の教えはあまねく行き渡っているという事を二重否定で強調されています。私達は気付いていても、いなくても、あまねくみ佛様の座に生かされています。

施食会の回向には「飽満法味、咸発正智、無量煩惱、皆得解脱、穩顯利益、同圓種智」とあります。

「法味に飽満して」佛法、つまり「美食」と云う「み佛様の恵み」に満ち足りて、「咸く正智を発し」私の身口意の三業の全てが正しき智慧を発し、「無量の煩惱は皆解脱を得」尽きる事の無く湧き出てくる貪瞋痴が分かち合いと優しさと感謝の心になり、「穩顯利益」私の中に隠れている事、私の身口意に顯れている事、私のご利益をいただき、「同じく種智を圓にせんことを」諸々の智慧をいただき、懺悔と誓願に生きていきますようにと、私達は皆お互いに願われています。

「俱胝の一指頭」に長慶禪師も玄沙禪師も随分手厳しい批判のようですが、これは「語抑下、意托上(抑下托上)」と云い、表面上では大変無礼で厳しい言葉で批判しながらも、その言葉の裏には、相手を認め、尊敬の意がこもった親切心溢れる独特の言い回しだったので。(続く)

面山瑞方禅師の「憎煙酒歌」

受動喫煙の苦痛を詠んだ学僧の「禁煙数え歌」

東京巣鴨とげぬき地蔵尊高岩寺住職 医師 医学博士
東北福祉大学客員教授 日本禁煙学会役員
高岩寺 来馬明規

【はじめに】

前回の「タバコ規制とSDGs」に
続き、今回も江戸時代の曹洞宗を代表
する学僧、面山瑞方禅師の話題です。
面山禅師は儒学者が作った「タバコ
礼賛の数え歌」を、「受動喫煙被害者
の恨み節」に改変したパロディで、
受動喫煙による耐え難い苦痛を表現
しています。厳格な学僧として知られ
タバコを厳しく指弾する面山禅師の
意外なユーモアを紹介していきます。
【数え歌なら「いなかっぺ大将」】

TVアニメ「いなかっぺ大将」主題歌
『大ちゃん数え歌』(1)(2)

- ひとつ ひとより力もち
- ふるさと後にして
- 花の東京で腕だめし
- 未来の大物だ大ちゃん
- アツチヨレ人氣者
- てんでん天下のいなかっぺ
- 弱気は見せないで
- いつでも 猛稽古
- きたえぬけぬけ得意わざ
- むしゃくしやするときは
- 大ちゃんドバツと丸はだか
- てんでん、天下のいなかっぺ

日本音楽著作権協会許諾
第2508662・5001号
(以下略)

「数え歌」という歌謡の形式はどの
ような意義を持つのでしょうか。
「好きな数え歌は何か」と問われれば、
筆者は反射的にTVアニメ『いなかっぺ
大将』(昭和45年・1970)の主題歌、
『大ちゃん数え歌』本歌を挙げます。
山奥で育った純朴な少年、風大左衛門
が、柔道家を志して上京し、失敗を重ね
つつも、力強く成長していく物語――。
その主題歌である本歌は簡潔な
七五調で、数詞に続く語が韻を踏み、
主人公の性格や物語の主題を鮮やかに
表現した傑作です。

当時高校生だった天童よしみさん
(吉田よしみな義)のデビュー曲で
もあり、完璧な歌声や和太鼓の名
調子が耳に響きます。本歌は日本で
最も愛唱されてきた数え歌のひとつ
といえるでしょう。

【数え歌と偈文・経典の類似性】

世界各地の数え歌には、くじ引き・
順番決め・宗教的儀礼(呪術・占い)
などに由来する民族文化があり
ます。元々は口伝でしたが、口誦に
馴染みやすい節まわしへと洗練
され、後に成文化されていきました。

その一方で、私たち曹洞宗の僧侶
が日常唱える偈文・経典にも、数え
歌に似た構成があります。

たとえば食前に唱える「五観之偈」
(二つには功の多少を計り 彼の来処
を量る。二つには己が徳行の…)は、
「数詞+助詞+漢字八字の句の読み
下し」という構成の反復で進行します。
歌と経典では成立の経緯が全く
異なりますが、このような偈文の形式
は、①主旨を明確にする ②記憶し
やすい ③声に出して唱えやすいとい
う目的があり、結果として「数え歌」
に良く似た効果があると言えます。

【面山瑞方禅師】

本題にはいります。面山瑞方禅師
(1683〜1769)は江戸時代に
曹洞宗学を大成させた、宗門を代表
する祖師です。今回は寛延元年
(1748)に、福井の永福庵で修行
された結制(集中的な修行期間)の
記録『永福結夏語録』に所収された
「憎煙酒歌」に注目します。(3)

「結夏」とは夏の結制を意味し、
「煙酒」はタバコないし喫煙行為を
指しています。「酒のように耽溺す
る品」という意味であり、「タバコと
酒」ではありません。

さて、この中に七行の数え歌が
あります。原文は漢文ですので、
現代語訳を先に示しますが、ワクで
囲った読み下し文は省略して読み
進めても構いません。

タバコを憎む歌「現代語訳」

(喫煙者の吐く煙を、面山禅師が
避けられずに吸いこんでしまつと)

- 一つ 吸わされると
私は思わず
鼻の穴を覆ってしまふ
- 二つ 吸わされると
私はじつと堪え忍び 潜かに
歯を食いしばる
- 三つ 吸わされると
煙がのどにむせて
身の置きどころがない
- 四つ 吸わされると
扇で煙をあおいでも
どうしても遮ることが
できない
- 五つ 吸わされると
とつと居ても立つても
いられずひとり静かに
席を立つ
- 六つ 吸わされると
深いため息をついて
屋外へと逃げるように出る
- 七つ 吸わされると
喫煙者の遠慮のない
好き勝手な振る舞いを
悲しく思う



図1 面山瑞方禅師の自描頂相
(永福庵蔵 永福会提供)

憎煙酒歌 於爾煙酒太可惡 族非霧非雲又非

図2 面山禅師のパロディ数え歌
「憎煙酒歌」冒頭(貝葉書院手刷本)

【読み下し文】

- 一つ 吸えは
我をして鼻孔を掩わせしむ
- 二つ 吸えは
堪忍し 潜かに牙を切る
- 三つ 吸えは
咽に哽せて退屈を生ず
- 四つ 吸えは
扇をもつて扇ぐも遮り難し
- 五つ 吸えは
奈ともすることを没し
独り席を起つ
- 六つ 吸えは
太息して外に向つて嗟する
- 七つ 吸えは
他の無遠慮なるを恨む

【現代の受動喫煙防止策に合致】

この歌は受動喫煙に耐える苦しさ
を率直に描いています。第一、二句
では悪臭とのどの刺激を、第二、四、
七句では息こらえや、居場所の移動を
強いられるつらさを、軽妙なユーモア
を交えて描き出しています。
見事な風刺歌であり、「全面禁煙

のみが有効で確実な受動喫煙防止法である」というWHO(世界保健機関)の結論とも一致しています。筆者は「最も古い禁煙数え歌」と位置づけています。

【面山禪師は受動喫煙症】

さて、このユーモアあふれる歌の背景には、面山禪師自身の深刻な健康被害がありました。禪師はこの数え歌を示した後に、

山僧煙に値は必ず頭痛す

と述べています。「山僧」は禪師自身を示す一人称。禪師はタバコの煙を吸わされると、毎回、耐え難い頭痛に悩まされていたようです。これは臨床的に「受動喫煙症」と診断され、筆者も専門医として、このような患者さんの診断、治療、対策に従事してきました。

しかし、禪師は喫煙癖があつても、尊い三宝の僧侶を憎まず、タバコそのものをユーモアで包みながら批判する(憎む)立場を示されました。

【面山禪師の数え歌は

タバコ礼賛歌のパロディ

「憎煙酒歌」冒頭にはさらに興味深い記述があります。

偶々林整宇の「愛煙酒歌」三十句を読み、その韻を用いて戯れにこの歌二首を作る

面山禪師の「憎煙酒歌」は禪師が原作ではなく、儒学者 林整宇の

「タバコ礼賛の数え歌」を元にした替え歌であることがわかります。そこで林家代々の著作全体を検索したところ、林鷺峰(林羅山の子で、整宇の父)の著作集『鷺峰林學士詩集』に元歌があることを発見しました。(3)

煙酒歌

寒節退休寢室裏 坐非雲非霧又非

図3 林鷺峰のタバコ礼賛歌「煙酒歌」冒頭(国会図書館蔵デジタル公開版)

元歌「タバコの歌」(現代語訳)

(私(林鷺峰)がタバコを吸う時)

一口 吸うと

煙が唇の生ぐさみを

洗いながす

二口 吸うと

煙が口の中に満ちて

齒をすすぐ

三口 吸うと

煙がのどを透き通って

すっきりする

四口 吸うと

煙が胃腸に行き渡り

便通がよくなる

五口 吸うと

煙が痰をきりゼーゼー

吸うと

吸き出ものが腫れない

(皮膚病がおさまる)

七口 吸うと

雑念が消え去る

【読み下し文】

一 吸えば唇辺の脛を

洗うがごとし

二 吸えば満口齒牙に漱ぐ

三 吸えば喉に透けて

鬱帯を散し

四 吸えば腸を搜して

何物か遮ん

五 吸えば痰を断じて

喘息静なり

六 吸えば彭亨膨すること

あたわず

七 吸えば他の念慮を消遣す

林鷺峰「煙酒歌」

『鷺峰林學士詩集』第七三

そして「煙酒歌」の最終節、鷺峰は次の様にタバコを褒め称えています。嗚呼煙酒汝我を利せり遂に睡魔を驅り諸書を加うるああ！私に恵みをもたらすタバコよお前は睡魔を追いかけて私の読書を助けてくれた

(現代語意識)

そもそも喫煙とは、みずから陥った「ニコチンの禁断(離脱)症状をニコチンによって一時的に緩和するだけの行為」であり、なにも得るものではなく、麻薬や覚せい剤依存者

が薬物をくり返し摂取することと本質的な差はありません。「煙酒歌」には鷺峰が「タバコの依存性」を自覚していたと思われる記述もありますが、喫煙の正当化を意図して数え歌を詠んだ裏には、タバコ煙の悪臭や受動喫煙被害のみならず、刻みタバコの調達や、喫煙補助具の管理で周囲を煩わせ、各方面から苦情があつたのであろうと想像しています。

【まとめ】

面山禪師の反タバコ思想には①タバコの依存性を見抜き、執着や迷いのものとなる反仏教的存在と捉えていたこと②禪師自身が受動喫煙症で、ひどい頭痛に悩まされており、タバコ煙を嫌悪していたこと③喫煙をことさらに正当化

して嗜んでいた儒学者らが強烈な仏教批判を展開していたこと、などの諸要素が重なり合い、ユーモアと鋭い風刺が両立した「憎煙酒歌」が生まれたように思われます。

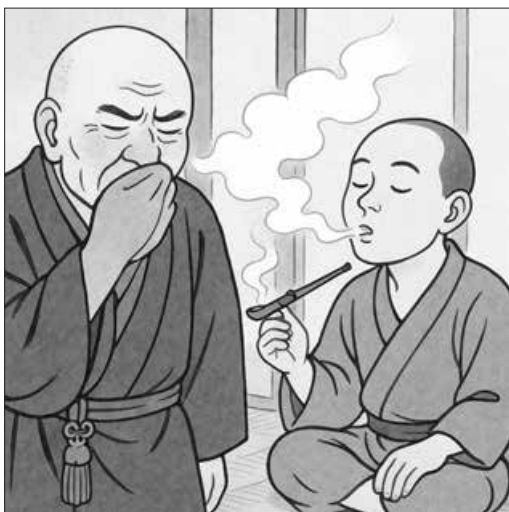
【附記】

(1) 『いなかっぺ大将』フジテレビ放映アニメーション作品(1970年)川崎のぼる原作タツノコプロ制作
(2) 「大ちゃん数え歌」石本美由起作詞市川昭介作曲吉田よしみ歌
(3) 面山瑞方の禁煙パロディ『永福結夏語録・憎煙酒歌』の典拠 曹洞宗総研究学術紀要2013年P.385・390

【謝辞】

面山禪師の頂相の資料をご提供頂いた永福会 会長 大安寺住職久松孝道老師に深謝申し上げます。

「ひとつ吸えば我をして鼻孔を掩わせしむ」





◆「在る」ことに気づく

11月に入り、朝晩の空気も冷たくなり、だんだんと冬の装いが見られるようになってまいりました。先日、ひすいこたろうさんの『幸せにならなかつたっていいんだよ』という本を読みました。そこには、こんなことが書かれていました。

「当たり前のようにある今の幸せを、思いつく限り書いてみましょう。『心臓が動いている』『物が見える』『話せる』『ご飯が食べられる』など……。

次に、あなたの一番の願いを一つ書いてみてください。

「ステキなパートナーがほしい」「年収1億円ほしい」など……。

では、先に書いた「当たり前」の幸せの中から3つを差し出して、その一番の願いと交換できるとしたら、いかがでしょうか？

実は、ほとんどの人が、交換できないんです。

今日から物が見えなくなってもいい、歩けなくなってもいい、家族を失ってもいいから1億円がほしい——そう思う人は、ほとんどいないのです。

当たり前前に思っていたことが、

実は一番の願いをはるかに超える、巨大な幸せだったんですね。」

私たちはつい、「もっとこうなったら幸せになれる」と、未来に幸せを探してしまいます。

けれど、仏教には、「知足(ちそく)——『足るを知る』』という教えがあります。

「足るを知る者は富む」これは、「もうすでに、たくさんのものをいただいている」と気づく人こそ、本当に豊かな人ですよ、という意味です。

朝、目が覚めること。ごはんを食べられること。家族や友人と笑い合えること。どれも当たり前のようにですが、どれも本当は、奇跡のような出来事です。でも、私たちは日々の忙しさの中で、その奇跡のありがたさを忘れてしまいがちです。そんなときは、ふと立ち止まって、深呼吸してみてください。「ああ、今日も奇跡のような恵みを受け取っているのだなあ」と感じてみましょう。私たちの修行で大切にしている坐禅も、「今」を生きたための修行です。

過去でも未来でもなく、「今この瞬間」にこそ、いのちが輝いています。そう気づいたとき、私たちはもうすでに幸せの中に生かされている存在だということに気づくのです。

瑞應寺専門僧堂受処主事 森 香有
令和七年十一月一日〜十日



■京都美術工芸大学輪蔵見学

十一月三日(月)、京都美術工芸大学の学生が、卒業模型製作の為輪蔵の見学に来られた。



■達磨忌

当山では十月の第一日曜日に住友供養が行われる為、十一月五日(水)、金岡山主導師のもと達磨忌正當献供厳修。

■金毘羅秋大祭

十一月二十四日(月)(旧十月五日)、当山鎮守金毘羅様の秋大祭を開催。

社殿にて、転読大般若祈禱、当山梅花講員の詠讃歌奉詠厳修。境内ではキッチンカーによる販売や福餅進呈などで賑わい無事円成。

十一月の日鑑

一日	祝禱
二日	日曜参禅会
四日	達磨忌速夜参玄会(六日迄)
五日	達磨忌正當
九日	日曜参禅会
十二日	精進御節料理教室
十五日	祝禱・略布薩
十六日	日曜参禅会
十八日	観音講(仏教勉強会)
廿一日	太祖降誕会
廿三日	日曜参禅会
卅日	日曜参禅会
略布薩	ベルモニー合同慰霊祭

十二月の予定

一日	祝禱
七日	臘八摂心(八日迄)
八日	日曜参禅会
九日	成道会
九日	断臂摂心(十日迄)
十日	震旦二祖忌
十二日	大本山永平寺従業員研修
十四日	旅行瑞應寺参拝団①
十五日	日曜参禅会
十六日	祝禱・略布薩
十八日	大本山永平寺従業員研修
十八日	旅行瑞應寺参拝団②
廿一日	観音講(仏教勉強会)
廿八日	日曜参禅会
廿八日	日曜参禅会
卅一日	略布薩、除夜の鐘



鐘 声

みどりのかげは 深けれど
紫金の台ぞ そびえたり
新居の広野を 見晴して
わが瑞應の 大精舎
眺かけて 鳴る鐘の
目覚めを誘う 声をきけ
威儀たたく あらわれて
坐禅の夜毎 すみわたる
春咲き誇る 桜花
莊嚴仏土 美しや
遠く海より 大銀杏
目あての色に 秋は燃ゆ
たゆるとしく 流れ来て
めぐみはゆたかに 溪の水
つとめいそしみ 励まずば
われらの行持 なかるらむ

赤松月船老師が作詞された「瑞應寺僧堂歌」、歌詞を口ずさめば自ずと瑞應僧堂の風光が目に浮かぶ。十一月を過ぎれば大銀杏が黄金色に色付き、布金の莊嚴仏土を目にした多くの参拝者に美しさと安らぎを受け取らせる。僧堂歌の歌詞を見ても、春夏秋冬それぞれに美しさ莊嚴さがあり、大自然の営みと僧堂の行持が別物で無いことが証明される。

平成の時代、この僧堂歌を歌う際には林西堂老師より四番最後の「節」われらの行持 なかるらむ」を繰り返すよう御指南いただいたことを懐かしむ。今日に至っても行持道環、臘八摂心の打坐に無上尊の仏陀を讃仰し法幸不尽。(道)